
銀魂 外伝～戦場を謳った少女～

いとむぎあむ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

銀魂 外伝「戦場を謳った少女」

【Nコード】

N4229D

【作者名】

いとむぎあむ

【あらすじ】

銀時たちを支えたたった一人の少女。少女に思いを馳せる銀時たちは……。

序章 過去つてのは、どんなに忘れたくても、忘れられない！

ずっと前……いや。ものすごく前のことだ。俺たちが攘夷志士として天人あまんととやりあっていた時代。あの女はいたんだ、すぐ傍に。

「銀さ〜ん、高杉、坂本、ツラ！食事、ちゃんと取らなくちゃダメだよ？」

「おーい、誰だよ？綾美あやみのおにぎり残したヤローはよお？」

「綾美。ツラじゃない、桂だ」

「はいはい。分かったよ、ツラ」

「ツラじゃない！桂だ！！」

幾野寺綾美いくのじあやみ。攘夷の兄についてここにきて、ウチの食事係をしてもらっている。おしとやかさそうだが、外見とは裏腹に、兄から剣術を教わっているため、そこそこ銀時の相手ぐらいにはなる。

「おーい、高杉い〜。テメーも喰つとけ」

「……」

「はあ〜……しかたねエな。綾美い〜、高杉ソイツの分俺によこせ」

銀時が高杉の分のおにぎりを取ろうとした時、綾美がひよいつと頭の上に持ち上げた。

「ダメ！これは、晋助のよ！銀ちゃんは、食べたでしょ？」

「ケチ〜！じゃ、代わりに綾美をくれ」

「〜いつペン死ね」

桂と高杉のはもりに綾美は大笑い。……これが、俺たちの最後の夜。

『万事屋銀ちゃん』の看板が立ててある二階。ソファで顔にジヤンプを乗つけて昼寝するのが、ご存知の通り、万事屋銀ちゃんの店主（？）、坂田銀時さかたぎんとき。

「……つくしよ……嫌な夢見ちまった」
と、呟いた。

壹章 女の嫁入りは突然。そして、別れも突然？（前書き）

はい。なんか、ウダウダと始まった外伝。ウダウダと付き合ってください。

壹章 女の嫁入りは突然。そして、別れも突然？

そして、少女は帰って来た。

街中で白の生地に桜柄の着物を身に纏い、背中の帯に懐刀をしま
い込む一人の少女。

「やっと……帰って来れた」

その頃。パトカーで見回りする鬼の副長・土方十四郎ひじかたとうしゅうと斬りこみ
隊長の沖田総吾おみたそうご。……今日も暇である。

「あーあ。なんでこんなクソ暑い日に、コイツと見回りなんぞしな
きゃなんねーんだよ」

「その言葉、そっくりそのまま返しますぜい、土方さん」

総吾はアイマスクをつけて助席に座っていた。と、その時。突然、
目の前に子供が飛び出してきて、土方はブレーキを踏んだ。

「チツ。間にあわ……！」

その時。子供を自分の腕の中に隠し、懐刀を前に構えた。

シュパッ

その瞬間。パトカーのタイヤがすべてパンクした。慌ててハンド
ルを切ったが、パトカーは店の看板に激突した。

「テメツ……あぶねーじゃねえか!!」

「あ……すいません。えっと……真選組の方ですか？」

笠かさを取ると、綺麗な淡いブラウン色のポニーテールに赤眼の美少

女が現れた。その姿は、あの沖田ミツバに……。

「あの……」

「あ、ああ。なんだ？」

「真選組の屯所に連れて行ってもらえませんか？お呼ばれしてるんです。近藤さんに」

「あ……？」

『真選組、屯所』

畳みの和室に近藤と向かい合って話す少女。それを向こうから見つめる隊士たち。

「おい。あの女の子は誰なんだ？ま、まさか！局長って実はロリコン？」

「んなわけあるか！副長ならまだしも」

「だな。副長って実はロリコンっぽいし」

「誰がロリコンだって!？」

「ふ、副長!!!!!!」

「テメーら、全員切腹だゴラァ!!!!!!」

刀を振り回す土方の姿に気づいた少女は、障子のドアを開けて、向こうを覗いた。すると、丁度土方と顔ギリギリの状態で硬直した。

「なっ!」

「あ。もしかして、照れてます？顔、真っ赤ですよ」

少し少女にからかわれ、土方は顔を真っ赤に染めた。

「どうも。今度からこの隊に入隊する、幾野寺綾美いくのしあやみです。早速なんですが、“万事屋銀ちゃん”ってどこですか？」

「はあ!？」

しかたなく総吾と、綾美をそこに案内する。玄関に着くなり、出てきた銀時に飛びついた綾美。

「銀ちゃん！！！」

「うわ！誰って……綾美？」

「うん！久し振り！！」

「綾美！！！会いたかった！！！！！」

抱き合った二人の光景に、土方は思わずタバコを落した。総吾は冷やかすように、ひゅー、ひゅーなどと叫んでいた。

「なっ！テメーらどう関係だ！！！？？」

「んあ？そりゃオメー、コイツは俺のかの……ぶほっ！！」

“彼女”という前に、顎に綾美のパンチを喰らった銀時は、そのまま気絶。

「ただの友達よ。昔あった攘夷戦争にアタシのお兄ちゃんが参加したの。その時に一緒についていったの。ちなみに現在の年は、銀時と二歳違い」

「えー、マジですか？ってことは……姉上と同じ年ですね」

「……」

「お姉さん？総吾クンってお姉さんがいるの？」

「はい……随分前に死にやした」

「あ……ごめん」

沖田ミツバ。総吾の姉で、土方の想い人。彼女は、つい先日になくなった。土方も内面では、まだ引きずっているらしい。それに綾美は、申し訳なさそうに顔を伏せた。そんな場の重い空気を吹っ飛ばしたのが、鼻血を出して倒れる銀時だった。

「まあまあ、そのへんにしてくれる？これから俺達で、いろいろやらなきゃならないことがあるし」

「おい。そのやりたいことってなんだ？言え。返答次第では、今すぐ地獄送りにしてやる。甘党天然パーマ」

すぐさま黒い瘴気オーラを発して刀を抜きかけた。

「ま、それは冗談として……。冗談だって」

「……で、ツラと晋助は？」

その言葉に土方と総吾は眉間に皺を寄せた。二人の表情に銀時は目を逸らし、綾美はきよとんとしている。

「あ……あいつ等はな……お尋ね者なわけよ」

「……え？」

「高杉のヤローは、幕府を潰すとかなんとか言ってるさ。ツラは、テロリストだし」

「ツラじゃない。桂だ」

「あ……ツラ」

「おお、久し振りだな……綾美」

「おい。今一瞬忘れたろ？アタシの名前」

「桂アア！！！！！」

土方は、一瞬にして刀を抜き、桂に斬りかかった。それに逸早く勘付いた綾美は、持っていた懐刀で、綺麗に受け止めた。

「なっ！テメエ……何のマネだ？」

「……結構軽いんですね。土方さんの剣筋って」

「っ！本気でいくぞ？」

「どうぞ」

と、その時。土方が少し刀に力を入れた瞬間、懐刀は折れ、そのまま綾美を斬りつけようとした。

ピシッ

土方の刀は、こともあろうに綾美の素手によって、頬ギリギリで振り払われた。

「なっ！」

「素手！！！」

流石の総吾もこれには驚いた。綾美の手は傷どころか、掠り傷1つ付いていなかった。

「ほお……。テメエ……。ただの剣士じゃねーな？」

「綾美……。お前、まさか……。」

「うん。火焰流かえんりゅうを祖父から教わったわ」

「火焰流……。聞いたことあるますぜ。すばやさは劣るが、その偉力。そして、刀を持たずして、素手の手法も教えるという古流の一つ」

柳生流などという数知れない有名な道場の中で一番古い流派である火焰流。乱暴な土方の刀筋では、絶対に綾美には勝てない。

「チツ。刀にヒビが入っちゃった」

「あ、ごめんなさい！弁償しますんで！！」

綾美は本当に申し訳なさそうに上半身を九十度下げてお辞儀。

「綾美。なんで、こいつ等といんの？」

「え……。？それは、今度から真選組の女隊士として、真選組に入隊するからです」

「何イイイイ！！！！！！！！！！！！！！！！綾美！！！！それはお母さん許しませええん！！！！！！」

「だあれが、お母さんじゃー！！！！！！」

「こんなマヨラーに嫁入りさせるくらいなら、俺が綾美を貰う！！！！」

「訳のわかんねー事言っつてんじゃねえよ！！！！！！」

と、まあ万事屋はいつも賑やかです。

「オイイイイ！！！！！！勝手にオチいれるんじゃねえ！！！！！！！！！！！！！！！！」

壹章 女の嫁入りは突然。そして、別れも突然？（後書き）

銀：おう！なんかギャグ満載だな。

土：知るか。・・・ってか、肝心のヒロインはどうした？

綾：はい！い！！すいません、遅れました！！

銀：オイイイ！！もうコーナー終わるよ！！！！

土：なんのコーナーなんだ？

銀：勿論、俺と綾美の愛を語るコー・・・ごふっ！！

綾：そのめでたい脳みそを真っ二つに斬ってやる。

土：・・・。

式章 ころいつ時に限って置き傘がないことに物凄く腹立つ……！（前書き）

なんか、銀時 綾美 土方みたいな？

式章 「こういつ時に限って置き傘がないことに物凄く腹立つ！！！！」

瓦の屋根の上で寝転がる銀時と高杉。二人の間に座る綾美。

「ねえ、銀時、晋助。この戦が終わったら、アタシどっちかのお嫁さんになってあげる。兄上も『二人なら、綾美を任せられる』って言うってた」

「そりゃいいや。じゃ、明日で最後にしようぜ。絶対生き延びてやる」

「晋助は？」

「……」

「って……寝てるし」

「じゃ、俺の嫁ってことで」

「フン。まだ返事もらってないもん」

「チツ。モテるなく、高杉は」

悔しそうに寝直す銀時。

「絶対やぞ、銀時。もう……死んでほしくない」

と、私は呟いた。

……

薄っすらと憶えている。

思い出したくないあの夜。

いつまでも背負っている過去。

いつまでも引きずっている過去。

忘れたいあの忌まわしい過去。

彼らは、そのように感じている。アタシは……………。

血塗られた遠い記憶。……よく憶えていない。

「おーい。起きろ」

土方の声。

「ん……………。今日は土曜日よ、お父様。まったく、ポケが激しいんだから」

「誰がお父様だ！！！ポケてねーし、今日は月曜だ！！！！」

「あ。トシ、おはようございます」

「テメーはその呼び方で呼ぶな！！！！」

「ケチくさいな。いいじゃない、十四郎さん」

「っ……………！！！！」

「ウソ。冗談よ。昨日、山崎さんから聞いたの」

「っ……………山崎のヤロ……………余計なことをっ……………！！！！」

「土方さん、着替えるから出てけ」

と、土方を部屋から追い出した。

昨日、旧友の坂田銀時に会いに行った女隊士、幾野寺綾美。銀時には入隊を反対され、しかたなく条件付きで綾美は入隊。その条件とは……。

「おい。来たぞ、綾美」

そう。毎日屯所に銀時は顔を出すこと。今日は、連れの二人も。

「よろしくネ。アタシ、神楽」

「僕は、志村新八です。でも、ホントに銀さんと二歳違いなんですか？綾美さんのほうが大人っぽいです」

「そうネ。なんか大人の匂いがするネ」

「そ、そう？」

「ちよつとヤミ臭くなつたんじゃねえか？おい多串くん。まさかとは思うけど、ウチの綾美ちゃんに手エ出さないよね？」

「んなわけあるか。俺がこんな餓鬼ガキに……ぶほっ！！！」

「誰がガキだ」

土方は勿論、綾美の鉄拳を喰らった。すると、綾美の後ろで昼寝していた総吾が起きた。

「なんでイ。旦那じゃねえですかイ」

「なんネ、サドアルカ」

「よお、チャイナ。今日こそ決着つけてやる」

と、やり合い始めた神楽と総吾。それを見て、綾美はクスクス笑い出した。それに銀時、沖田、土方は、ミツバと重ねた。土方は思わず口からタバコを落とした。

「……」

「あ、土方さん！タバコ、落としましたよ？……土方さん？」

「……いや。なんでもねえ」

「ふうん。……なんでも、ミツバさんと重ねるんですね」

「……！！！！！！」

「……ふう、さてと。私はちよつと道場のほうへ行ってきました。

長刀は久し振りだからね。慣らさない」と

静かに去っていった綾美を見て、銀時はポリポリと頭を掻いた。

「あー・・・なんでこういう時だけ勘強いんだか」

「ああいう女は、どーも苦手だ」

と、タバコに火を点けた土方。

竹刀を振るう綾美。竹刀を一度下ろすと、懐から2つに折ったあ
る紙を取り出した。静かに開くと、そこには家族の姿が写った写真
だった。

「・・・兄上、母上、父上。私は・・・元気よ」

「幾野寺義明」

「！銀ちゃん」

「よお。相手してやるうか？」

「・・・いい。ねえ、どうして私が助かったか・・・知りたい？」

「いや」

「じゃ、これは独り言」

「・・・」

あれは、最後の夜を終えた次の日の朝。

「じゃ、行ってくるわ」

「・・・」

「終わる？これで戦は終わるん？」

「ああ、終わるとも。綾美、良い子で待っているよ？」

「・・・うん」

綾美の頭を撫でて、義明は銀時たちを連れて戦に出掛けた。

小屋で数人の武士たちと帰りを待つ綾美。その時に小屋に投げ込
まれたのが、火玉だった。小屋どんどん燃え上がり、しかたなく怪
我人を担いで皆で外に逃げた。しかし、それが天人あまんとたちの思っ壺だ

った。外にいた見張りはすべてやられ、外で私達を待ち構えていた。その時は、足が竦んで立てなかった。そして、私の足元に転がった刀。それを手に取った。しかし、すでに囲まれていた。

「おい。この女、ボスの土産にしね？」

「いいな」

と、綾美のほうへ手を伸ばした。

ブシュツ

天人の手は、バツサリ斬られた。ゆらりと立った綾美の目の色は完全に赤く染まっていた。

「なっ！よくも・・・小娘があああ!!!!!!!!!!!!!!」

「やつちまえ!!!!!!」

数時間も経たないうちに綾美の足元には、天人の死体が転がった。正気を取り戻した綾美は、その光景に絶叫した。

「あ・・・あ・・・うああああああ!!!!!!!!!!!!!!」

刀を落とし、その場から逃げ出した。その後は・・・よく覚えていない。

そして、ある老夫婦に拾われ、そのまま置いてもらった。戦の終戦後、私は家へと戻った。そして、兄の死を知らされた。

.....

「ま。そしてここにいるの。．．．まだ忘れられない。あの肉を斬った感触が．．」

「．．．」

「あれ以来、人を斬る時はいつも理性が飛ぶ。気が付いた時には、足元にいつも死体がある。それが、怖くて人は斬れない」

「．．．じゃ、どうしてテメーはここにいる？」

「え．．？それは、祖父が亡くなって、祖父が真選組の近藤局長に言っただけに．．．」

「違うな」

「？」

「テメーは他人を斬るのが恐ろしいんじゃない。いつか、大切なモノまで斬っちゃうんじゃないかって恐れてるんだ」

「．．．これ以上、何かを失うのが怖い。銀時！」

綾美は、泣き顔を晒し、銀時に飛びついた。そっと抱きしめると、綾美の顔を上げ、そっと口付けした。

ポトッ

それを目にしてしまった土方は、タバコを口から落とし、舌打ちしてその場を静かに去った。

鬼兵隊

「晋助、面白い情報が入ったでござるよ」
「なんだ、万斎か」

「あの幾野寺義明の妹、幾野寺綾美が真選組に入隊したでござるよ」
「・・・そうか。・・・ククッ、面白いことになってきた」

嵐の予感に今の私はまったく気づかなかった。

式章 ころいつ時に限って置き傘がないことに物凄く腹立つ！！！！（後書き）

銀：すっげえ、俺と綾美のラブシーンがあるよ！なあ、多串クン

！！

土：誰が多串だ！・・・チツ。

銀：あゝ？今舌打ちしなかったあゝ？？

土：いっぺん死ね。

綾：ほらほら、喧嘩しないの！何、副長もラブシーンが欲しかったの？

土：／／／／んなわけあるかああ！！！！

綾、銀：あ、凶星。

参章 女の初恋は、大抵失恋で終わることが多い！人生って悲惨だ！！！！

高杉……晋助。晋助！！銀……ちゃん？ヅラ……坂本
お……皆……どこ？

「……い……み」

え？誰？？

「あや……」

誰？

「綾美！」

「あ！」

目が覚めた時、綾美は布団の中にいた。道場で銀時と話していて、キスして、その後に倒れてしまったんだ。

「ん……土方副長」

「おい、大丈夫か？」

「はい。大丈夫です」

「そうか」

沈黙が降り立った。

「あの……副長？」

「なんだ？」

「……いえ。なんでもありません」

「そか……幾野寺」

「はい？」

「敬語」

「？」

「敬語、やめろ」

「でも……」

「やめろつて！」

綾美は土方の怒鳴り声に身を震わせた。土方はハッと我に返り、誤った。

「……わりイ」

「いえ。……何か、気に障ることを……私がしました？」

「……たる」

「え？」

「キス……してたる？」

「!!!!!!????????……見てたの？」

「ああ」

綾美は顔を伏せ、指先で唇の輪郭をなぞった。すると、タバコを灰皿に押し付け、土方の手が綾美の髪へと伸びた。ゆっくりと髪ゴムを解いて、その髪に口付けした。

「え……？」

「……」

「ひ、土方さん!？」

「……なんだ？」

「何してるんですか？」

「……俺の女だモウっていう証拠をつけてる」

「!!!!!!ひ、土方さ……!!」

土方の唇は首筋へと移動し、紅い花を無数に咲かせた。ゆっくりと唇を離し、意地悪そうに笑ってみせた。

「これで、万事屋のヤローも近寄ってこねえだろ？」

「//////いつペン死ね!!!」

綾美は顔を真っ赤に沸騰させ、枕を土方のほうに投げた。枕は土方の顔を直撃し、そのまま倒れた。綾美は両手で顔を覆ってその

高杉の足元に血液が滴った。綾美は後ろから向けられた刀を素手で握っていた。

「ほお・・・威勢の良い女になったじゃねえか」

「んんっ!」

顔を無理やり向けられ、深く口付けされた。無理やりこじ開けられた口の中を舌がどんだん犯してゆく。

「んっ・・・やだっ・・・しん・・・す・・・け・・・!」

「綾美。テメーは俺の女だ。その副長さんにやらねえよ」

「んっ・・・んあ・・・!!」

「綾美!どこだー!!」

その時に響いたのが、土方の声だった。高杉は舌打ちして、そつと逃げていった。綾美は力が抜けて、その場に座り込んでしまった。

「くそっ・・・!晋助え・・・」

「綾美!・・・その手・・・どうした?」

「っ・・・、壊しても・・・変わらないのに・・・」

「綾美?」

「晋助のバカ」

「は?」

「・・・トシ、帰ろ」

「お、おい!と、トシって・・・」

その夜。食事も摂らずに、綾美は部屋に戻ってしまった。そして、誰もいない庭の池の前で、綾美は首からぶら下げていた懐中時計を無理やり引きちぎって、池に捨てた。

・・・。

「やるよ」

「え？・・・これって、いつも晋助が大切にしていた懐中時計じゃん！ダメだよ！！」

「いいよ。どうせ、もう帰ってこねえかもしれねえし」

「・・・酷い。アタシを一人にする気？」

「・・・」

「絶対帰って来い」

「・・・ああ」

・・・。

ゆっくりと池に沈んでいく懐中時計を見送り、涙を流しながら笑った。

「バイバイ。アタシの愛した高杉晋助」

そして、戦いは始まった。初恋は、悲惨に幕を閉じた。

四章 指を紙で切ると痛い！

真つ赤に散つた紅い花。．．．兄の周りにいっぱい咲いていた。彼岸花の如く寂しく散つてゆく。綺麗な血。見たくなかったのに．．．

いや．．．置いていかないで。私を．．．血でいっぱい戦場に置いていかないで！銀ちゃん！．．．皆！！！！

「銀ちゃ．．．あれ？」

綾美が手を伸ばした先には、寝ている自分の顔を覗き込む銀時。

「．．．何やってるの？銀ちゃん」

「あ」

この後。銀時は一分後に綾美の鉄拳を喰らったのは、言うまでもない。そして、障子を一枚壊したことも（銀時が吹っ飛んで壊した）。

「もーっ。寝込みを襲うなんて、ストーカーと同じよ」

「ひでーな。俺は、お前を王子様のキスで目覚めさせ．．．ぐはっ

！！」

「アタシは白雪姫なんて軟弱な女じゃな！！！！」

「おいおい。女が軟弱じゃねーなんて、色気ねえぞ」

「っせえ。いいもん！彼氏ならもういるし」

「多串クン？やめたほうがいい。あのヤローは、マヨラー大魔王だからな。ヤツの子なんて間違っても産むなよ。きつとマヨラー王子だぜ」

「おい。マヨネーズを馬鹿にすんじゃないやねえよ。万事屋」

「ゲツ。噂をすれば、だよ！」

「おはよう。十四郎さん」

「おう」

嬉しそつに微笑む綾美を見て、土方は銀時と総吾から黒いオーラを向けられていた。

「いーよな。多串クンは、あの寝顔や笑顔を独り占めにできてさ。あー、もつたいねえ」

「旦那。正確には、あの体に心も独り占めですよ」

「テメーらっ……嫌味か!？」

「さあく??？」

二人して土方をいじめていた。その光景に綾美は思わずお腹を抱えて笑った。

「アハハハ!!!はあ……こんなに笑ったの久し振り。……

ねえ」

「ん?」

「あ?」

「なんでイ?」

綾美は少し間を空けてから、ゆっくりと言った。

「皆、私を置いていかないでね」

「……」

「綾美ちゃん!あつちで遊ぶネ」

「うん!」

と、話の途中で綾美は立ち上がって、神楽達と近くの公園へ走っていった。

「……女って分かんねえ」

銀時は、そう呟いた。

公園のベンチに座り、定春さだはると遊ぶ神楽を見守っていた。そして、俯き手の平を睨んだ。そこには、高杉の刀を握った時の傷。
「やっぱり、自分で何とかしなくちゃダメだよな？」

《もういいじゃない》

「！」

自分の中にいるもう一人の自分『綾音』が言ってくる。

「よくない。私は、過去との決着をつけなくちゃいけないの！じゃないと、苦しくてしょうがないの！！」

《ふうん。でもさ、ホントはまだ好きなんじゃないの？晋助のこと》
「そんなことない！今私が好きなのは、トシだもん！」

《嘘言うな。あの時計だって、一度捨てたけど、どうせまた拾うんだろ？》

「……そんなこと……ない。私は……嘘なんか……」
《……決心決めないよ。あんたは結局、どうしたいわけ？》

「……私は……過去の清算をしに行く」

《よし。じゃ、行っておいで。アタシは何も言わない》

「うん。ありがとう」

綾美はベンチから立ち上がり、神楽を置いてその場から立ち去った。

一方、高杉達は……。

「晋助様。真選組の女隊士がこっちに向かってるっスよ」

「女隊士？……ああ、アイツか」

「どうします？殺しますか？」

「……出来るならな」

「？」

「今宵はかぐや姫が舞い降りるぜ」

銀魂 外伝～戦場を謳った少女～

高杉は二味線をブンツツと鳴らした。

四章 指を紙で切ると痛い！（後書き）

銀：綾美ちゃんが高杉にイイイ！！！！

綾：うるさい。

銀：綾美ちゃん！！まさかアイツに会いに行くのか！！???

綾：・・・悪い？

銀：土：ゼツテエー行かせねエ！！！！

綾：・・・なんでトツシーまでいんの？

土：ギクッ

綾：もういいわ。はい。次回予告。

銀：ついに綾美と高杉のヤローがぶつかるぜ！

綾：ま、期待しててよ。

五章 女の執念を甘く見るな。(前書き)

結構短いです。何故かというのと、次の話ですべてを詰め込むためである(知るか!)!

五章 女の執念を甘く見るな。

私は、仲間に友に愛する人に、過去へと置き去りにされた。いくら手を伸ばしても届かなくて、私は刀を握って、すべてを捨てた。・・・捨てたはずだった。けど、結局は追いかけていた。捨てきれなくて、遠ざけることも出来なくて、私は地に倒れた。

大船の前。

「コソコソ」

幾野寺綾美いくのじ あやみは刀を握り、髪を上の方に結んだ。そして、袖を紐で纏めた。

船の上になると、大勢の鬼兵隊たちが綾美を取り囲んでいた。

「・・・ザコ共が」

「何者だ!？」

「・・・そうだな。まず名乗るのが礼儀だな。私は、幾野寺綾美だ。お前は？」

「来島また子」

「へえ・・・。高杉の部下か。さて、アナタは・・・強いのか?」
「え・・・?」

一瞬のことだった。突然目の前から綾美の姿が消え、いつの間にかまた子の背後に立っていた。

「チツ!」

「遅い」

綾美は、また子が銃を構える前に、殴って気絶させた。

高杉のいる部屋に、兵たちがドタドタとやって来た。

「高杉様！女が・・・、女の侍が！！」

「ふん。来たか」

「捕まえて、全部吐かせます！」

「・・・出来るならな」

高杉は、クツクツと笑った。兵たちはそれに恐怖を感じ、汗を浮かべて去っていった。

その頃、真選組屯所では、いつまで経っても帰って来ない綾美を心配し、誰一人として眠れない状況が続いていた。

「綾美」

『決着。つけてくるよ』

綾美の部屋にあった置手紙。それには涙の跡。書きながら、流した涙の跡だった。きつと、もう帰って来ないつもりだろう。生きて帰って来れないことを承知してのことなのだろう。けど、彼等は決して動かない。彼女の誇りとプライドのために。彼等は、彼女の帰って来る場所で待ち続ける。

大人数の浪士たちに対して、立ち位置をまったく変えず、倒していく。すべて峰打ちで。

「退きなさい。用があるのは高杉だけです。時間の無駄です」

綾美は、一步一步進み、鬼兵を倒してある部屋に辿り着いた。

「よオ。綾美」

そこにいたのは、煙管を吹かして微笑む高杉晋助。

「高杉。・・・決着、つけよう」
汗ばんだ腕で刀を上げ、高杉に向けて言い放った。

五章 女の執念を甘く見るな。(後書き)

綾：あーあ。次で最終回。きつとアタシ、このまま……

銀：綾美……。

綾：でも、大丈夫！心残りはございませーん！……あれ？これって、俗に言う『ネタバレ』ってやつ？

最終章 現実には背筋伸ばしてしっかり見る

ねえ、知ってる？恋人同士って、死んでもいつか生まれ変わる時も、想いが強ければ、結ばれるんだって。すごいよね。まあ、私たちは叶わない願いだけど、本当だったら、素敵だよね！

綾美が高杉と甲板で斬り合い始めてから、約一時間と三十分経った。高杉はまだ余裕そうだったが、綾美の体力は限界に近かった。

「ハア…ハア…」

荒い息遣いが聞こえる。その中、何人もの高杉の部下たちが、見ている。息を飲むほどの斬り合い。刃と刃がぶつかり、鈍い金属音を響かす。先ほど降ってきた雨は更に強くなり、少しずつ二人の体温を奪っていく、厳しい状況。少しの早まった行動が命取りとなる。

「はっ。やるじゃない」

「…テメーもな」

ほんの、ほんの一瞬だった。高杉が私の視界から消え、声を聞いた時には、私の背後に立っていた。私のミスだ。体温が奪われ、ボーンとしていたのだらう。あーあ。馬鹿みたい。

「あーあ。畜生…っ！」

刃が、刀身が私を貫いたのも、一瞬。静かに雨の音に消された肉片に刺さる音。そして、血飛沫を浴び、抜かれた刀。フラフラと腹部を押さえながら、血塗れの左手で高杉に凭れ掛かるようにして胸倉を掴んだ。そして、脇差を取り出し、高杉の袖の中の左腕に刺した。

「はは。…ばーか。………ここでは死ぬけど、………地獄の底から、戻って、…地の果て…まで、追い………かけ………やる。それまで………」

せいぜい、死ぬなよ」

「…ああ。いいぜ。どこまでも追いかけて来い」

「……へっ。やっぱ、アンタのこと……、大ッ嫌い！」

綾美は、胸倉を掴む手を離し、そのまま後ろから、海に落ちた。

……。

「、み、…綾美…！」

目を開けると、自分の顔を兄・義明が覗き込んでいた。

「……近いよ、お兄ちゃん」

ああ。いつもの朝の光景だ。

「ほら、起きろ、寝ぼすけ！朝ご飯出来てるぞ」

ほら、いつもみたいに笑ってくれる。

「わかった。今行くよ」

いつもみたいに手を伸ばしてくれる。

「あら、おはよう。綾美、お皿出して」

「はい」

「義明、お父さんも起こしてきて」

「わかった」

これが、朝の日常風景だった。

「おはよお……」

「あらあら。さあ、食べましょうか」

「はい！いただきますーすー！」

あーあ。こっちが現実で、あっちが夢だったら、どんなに幸せだろう。でも、もう帰って来ないんだ。

…、あ…み、…綾美。
「？」

綾美。おかえり！

「…ただいま」

……………。

その後。やはり、綾美は帰って来なかった。死体すら発見されず、墓すら立てられなかった。しかし、彼女の墓は、彼女の知人の魂こころにひっそりと立てられた。

そして、紅桜編に突入する。

最終章 現実には背筋伸ばしてしっかり見る（後書き）

綾：私、死んじゃったね。ま、幸せだからいいや。皆様、ここまで読んでくださって、ありがとうございます！これからも、夢見獏先生をよろしくお願いします！

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4229d/>

銀魂 外伝～戦場を謳った少女～

2009年3月24日10時20分発行